

初公開カラー！出産前に子供の病気を治す最新医療の現場

「子宮内の胎児の顔」撮った！

胎児鏡は現代の「神の手」、小さな命を救う新たな試み



手術は1時間から1時間半。慎重にモニターを眺めながら胎児鏡とレーザーで処置をしていく(大)。トロッカーを通じて胎内へと入っていくレーザーの先端が光る(小)

まだ子宮の中にいる胎児の姿を直に見ながら手術を行う。そんな驚くべき最先端手術がある。左ページの写真のように、これまでエコー検査装置でしか見られなかった胎児の様子を胎児鏡と呼ばれる内視鏡を使って実際に見ることで、今までにない難しい手術を可能にしたのだ。今回本誌が掲載したこれらの写真は実写によって子宮内を写し出した非常に珍しいものだ。こうした技術の進歩により、産まれてくる前の胎児の先天的な病気や、出産するに危ぶまれる難病から命を救う、新時代の手術が実施されているのである。手術を受けた母親も内視鏡での作業をモニターで眺めることで、産まれる前に我が子との対面を果たすことになる。

写真の患者は34歳で、双子を妊娠していた。しかし、胎内の双子が重大な症状を抱えていることがわかり、19週3日目に手術を行うことになった。病名は双胎間輸血症候群(以下TTTS= twin to twin transfusion syndrome)といい、双子が共有する胎盤内で血管がつながってしまい片方の胎児にだけ多くの血液が流れることから起こる病気である。これに罹ると血液が送り込まれる側(受血児)の発育は良くなり、もう片方(供血児)は衰弱していくことが多い。ただ、受血児も血液量が多すぎると心臓への負担が大きくなり、予後が悪くなるケースも多いという。医療ジャーナリストの伊藤隼也氏が語る。「こうした症例では、かつては一方もしくは両方の死亡を覚悟しなくてはならなかったんです。また、胎児鏡を使ったレーザー手術は、いまも日本では数カ所しか治療出来ないことから、治る」可能性のあることすら知らない人も多いんです」

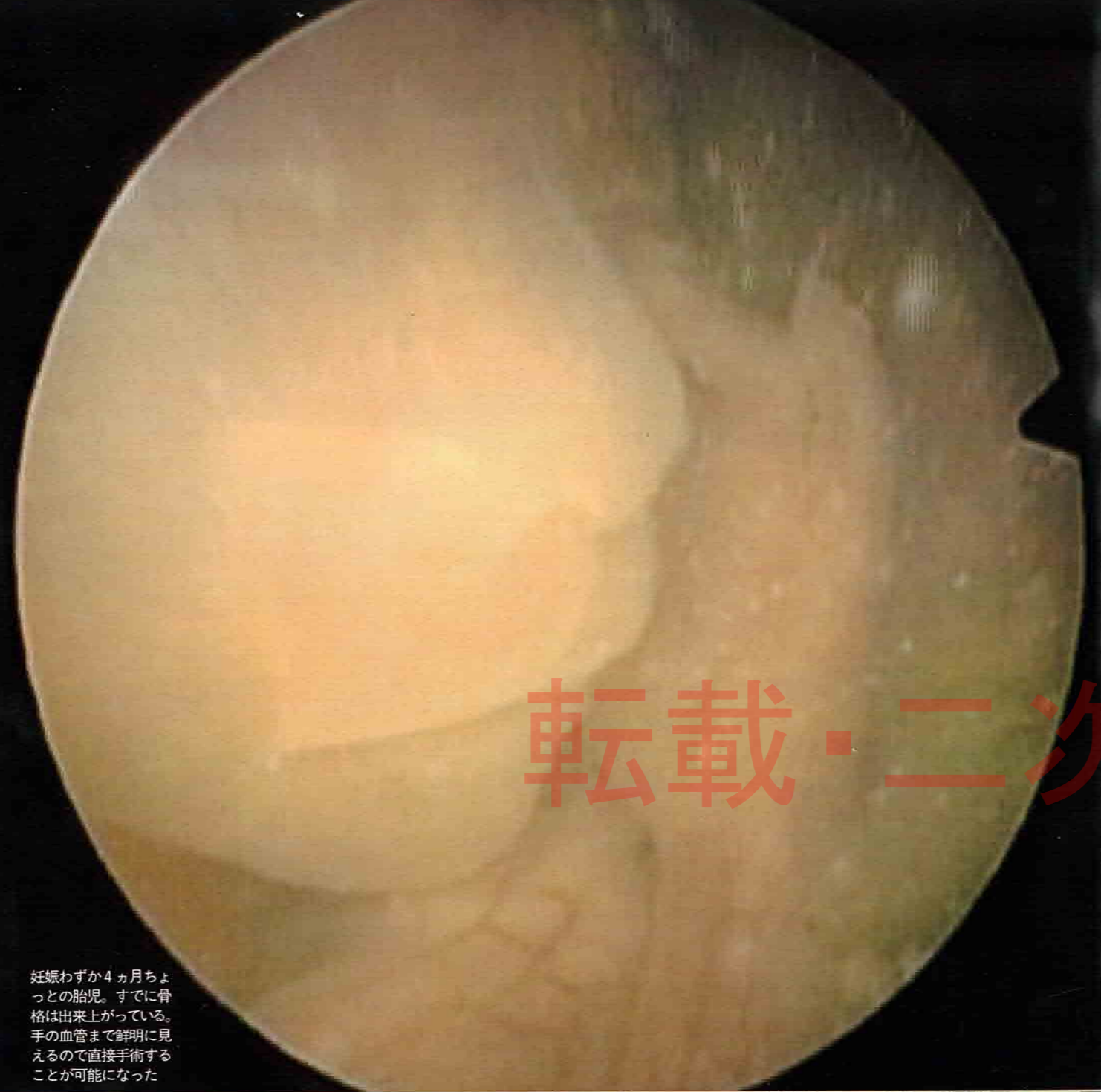
手術はまず横腹の部分の皮膚を少しだけ切開し、直径3mmのトロッカーと呼ばれる細い筒を挿入する。この筒の中を通して、直径5mm(0・55mm)のレーザーファイバーを用いて胎盤内の問題の血管を凝固させる。こうして血流を止めることで胎盤を通じた双子の血流を正常なものにするのである。写真の患者の場合、手術時間は約1時間半で終わった。手術を受けたときの胎児の推定体重は、受血児が200g、供血児が100g。手術ではレーザーによってつながった6本もの血管を凝固させ、血流を止めることに成功した。母親は手術から約4カ月後には妊娠34週目で無事二児を出産することができた。産まれたときの体重はそれぞれ2124gと17720g。その後も両児共に順調に発育している。最先端技術により、いままでは触れることすら出来なかった箇所での手術が可能になった。日々の医療技術の進歩が失っていたかもしれない命を救ったのである。

前出の伊藤氏がこう説明する。「最近、高齢での出産者が増加しています。それにもなっって不妊治療も盛んになっているんです。その影響で、実は双子の妊娠が増えているんです。こうした背景などがTTTS患者の増加を生み、また今回のような胎児鏡手術の機会を増やしているとも言えるんです」

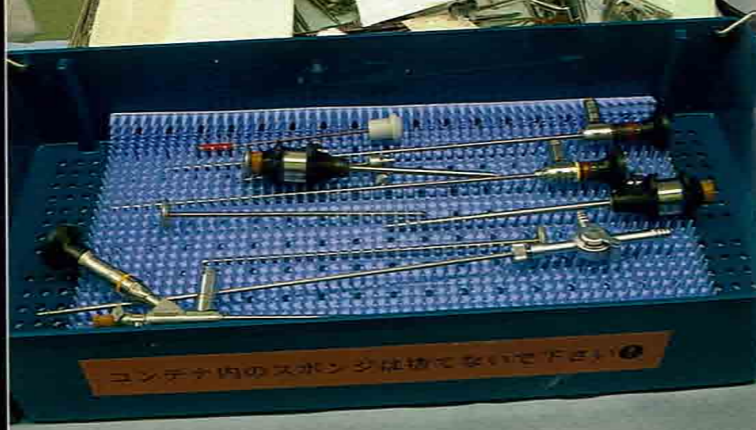
一つの現代病を通じて最先端の医療技術が磨かれる現場がここにもあるのである。5月19日放送の「金曜エンタテイメント」生と死のはざままで：最先端医療が奇跡を起こす！最強ドクターが救った命と家族の絆スベシャル(フジテレビ系21:00)では、今紹介した胎児治療をはじめ、乳癌患者の乳房復元や脳内動脈瘤、認知症など治療困難な病気に立ち向かう医療の最前線が紹介されている。

ある産婦人科医はみすからが行う胎児治療について、「神の領域へと踏み込んだ治療」という。そこに救われるべき命がある限り彼らの挑戦は続いていくのだろう。

転載・二次使用禁止



妊娠わずか4ヵ月ちょっとの胎児。すでに骨格は出来上がっている。手の血管まで鮮明に見えるので直接手術することが可能になった



妊婦への負担を減らす極細のトロッカーの数々。この筒の中を通して胎児鏡が子宮内の治療箇所へと届く。この手術は全国でも4ヵ所でしか実施されていない



中央から左へ伸び、白く光って見えるのが胎児のへその緒。レーザーファイバーは胎児の間を抜け、胎盤の治療箇所へ達し、治療する